

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第590号 平成25年8月8日

伝わる力、伝える努力

6月22日、札幌市内のホテルで、大和遠州流茶道家元の第20代から第21代への継承式典が、全国から参集した弟子達が見守る中、厳かに執り行われました。

お茶の流派は、表千家、裏千家、武者小路千家という3千家を筆頭に、数々の流派がありますが、家元が北海道に在住する流派は大和遠州流の他にはありません。

皆さんは「お茶の家元がどうして北海道に」という疑問を持たれるかも知れませんが、その事に答える前に、そもそも大和遠州流とはどのような流派なのかについて説明して置きたいと思います。

大和遠州流の祖は、江戸時代初期に活躍した大名であり有能な官僚であった小堀政一（遠州）です。この小堀遠州は、15歳位から大徳寺にて禅を学ぶと共に、古田織部の弟子となり本格的な茶道修行に入ります。この古田織部という人は、千利休の弟子の中でも「利休七哲」といわれる程の高名な茶人で、遠州が出会った当時、既に山城の国西岡に3万5千石を領する大名となっていました。

織部のお茶は、利休の「侘び数寄」を踏襲しながらも、武門の出に相應しい茶、即ち草庵ではなく書院における茶法を制定したといわれており、彼の渾発する作意は利休をして「これはお弟子になり申すべし」と感嘆させる程のものでした（森蘊著「小堀遠州」から）。

その織部も、遠州の才能を早くから認めていた様です。遠州が18歳の折、洞水門という新たな工夫をし、これに対し織部が「作介（遠州の幼名）は将来名人に成るべき人」と感心した（熊倉功夫著「小堀遠州茶友録」から）という事ですが、茶の湯における遠州の新しい着眼と工夫は、しばしば師匠の目を見張らせるものがあったようです。

織部から大変熱心な指導を受けた遠州は、やがて「綺麗さび」という彼独特の境地を切り開いていく事になります。

遠州が生きた寛永という時代は、戦国時代が終焉し、安定した社会へ移行する時期であり、王朝文化の古典主義的な美や、均整のとれた優美な装飾性と繊細さが求められるようになっていました。この時代を映す新しい美意識を象徴するのが「綺麗」という言葉です。

遠州は、利休、織部の茶の精神を受け継ぎながらも、気品ある白い茶碗を使い、

明るく総合的なしつらえに徹したのは、そうした時代を映したものであり、それ故に、「遠州の茶」は「綺麗さび」と呼ばれており（小堀宗実著「茶の湯の不思議」から）、そうした遠州の美意識は、今日においても色褪せてはおりません。

その後、「遠州の茶」は、彼の息子や弟子達によって受け継がれて行きます。

遠州の次男正之（長男は、夭折しています）は、幼少より天才の誉れ高く、父の期待に応え茶人として成長します。彼は、茶道の巨匠として江戸でも伏見でも人気があったようです。この正之の直系の子孫は、遠州流の宗家として「遠州の茶」を今日に伝えています。

遠州の三男正尹（まさただ）もまた、父に似て才能豊かな人であり、特に茶具の鑑定にかけては一際優れていたようです。

大和遠州流は、遠州を祖とし、その茶を受け継いだ正尹は当流第2代の家元となります。その後は、代々武家の門弟の中から力量、資質に優れた者が家元を継承して来ました。

明治の御代になって武家の時代ではなくなりましたが、大和遠州流は武家茶道としての気風を今なお大切にしています。

大和遠州流が北海道に根を張るきっかけは、蓼沼紫英師が今から約100年前、明治43年に渡道され、留萌の地に当流の種を蒔いた事に始まります。その後、様々な困難を乗り越え、大勢の門弟を育て、その功績が認められて昭和7年に第18代の家元に就任されます。これ以降代々の家元は、北海道から離れる事無く、全国に散らばる多くの弟子達に「遠州の茶」を伝承すべく尽力されています。

さて、茶道というものは、突き詰めていくと湯を沸かし、茶を点て客に振る舞うという極めてシンプルなものですが、それが500年経った今日まで伝統文化として受け継がれて来たのは、何故でしょうか。

それは、お茶を点てるという一連の所作の中に、「侘びさび」という言葉で代表されるような深い精神性を宿しているからであろう事はいう迄もありません。しかし、それ以上に重要な事は、茶道が、岡倉天心がその著「茶の本」の中で、「われわれの住居、習慣、衣食、磁器、漆器、絵画—我々の文学さえも—すべてその影響を受けている」と述べている様に、日々の生活習慣から美的感覚、人との関わり方、もっといえば日本人の心の在り様にまで深く根を下ろしている、こうした内発する力こそ、茶道が伝統文化として今日まで継承されて来た大きな理由ではないでしょうか。

こうした茶道が持っている力そのものは、千利休や古田織部、小堀遠州をはじめとする多くの茶人達の創意と工夫によってもたらされたものですが、茶道が過去の遺物としてではなく、今日においてもなお生き生きとした存在であるのは、時代の変化の中で常に工夫を重ねながら先人の茶の精神の具現化に努めてきた、累代の家

元達の努力の賜物である事はいふ迄もありません。それは逆にいえば、今後もそうした努力が払われなければ、茶道といえども過去の遺物になりかねないという事でもあるのです。

時代は今大きく変わろうとしています。そうした中で、大和遠州流では新しい家元が誕生しました。新家元は、時代の変化の中で、「遠州の茶」の精神を如何に形あるものにし、次の世代に伝えて行くかという、伝承者としての重い責任を背負う事になりました。

大和遠州流は、茶道の世界では誠に小さな流派に過ぎませんが、今後、時代の変化という風をしっかりと捉えながら、大いに発展される事を祈っています。

(塾頭：吉田 洋一)